

2024 年度ティーチング・ポートフォリオ 作成ワークショップ開催報告

北野健一*1, 稗田吉成*1, 竹元仁美*2, 山川修*3, 山下哲*4

A Report on the Workshop of Teaching Portfolio in 2024

Ken'ichi KITANO *1, Yoshimasa HIEDA *1, Hitomi Takemoto *2,
Osamu Yamakawa *3 and Satoshi YAMASHITA *4

要旨

大阪公立大学高専は、2009 年 1 月に全国の高等教育機関で初めて学内・対面でティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップを開催した。その後、毎年 2~3 回のワークショップを開催し、教育改善に取り組んできた。現在常勤教員 64 名中 52 名(81%)がティーチング・ポートフォリオを作成している。

本稿では、2024 年度に開催した第 31・32 回のワークショップについてワークショップ参加者の感想を報告した後、作成者の事後アンケート結果から教育改善の効果を検証する。

Key Words: ティーチング・ポートフォリオ, 教育改善, メンティー, メンター, スーパーバイザー

1. はじめに

大阪公立大学工業高等専門学校(以下、本校と略す)は、2009 年 1 月に全国の高等教育機関で初めて学内でティーチング・ポートフォリオ(以下、TP と略す)作成ワークショップ(以下、WS と略す)を開催した[1]。以後本校 TP 研究会は年 2 回(2011 年度は 3 回)の WS を開催し、TPWS による、より効果的な教育改善の研究に取り組んできた。2025 年 6 月現在、副校長を含めた常勤教員 64 名中 52 名(81%)が TP を作成している。本稿では、2024 年度に開催した第 31・32 回 TP 作成 WS の概要について記した後、参加者の感想を記す。なお TP についての詳細、特徴等については、既報[2]ならびに書籍[3][4]を参照されたい。

2. ワークショップの概要

2024 年度に開催した WS の参加者を表 1 に示す。日程は、第 31 回が 2024 年 9 月 10 日~12 日、第 32 回が 2024

年 12 月 25 日~27 日である。第 31 回、第 32 回ともアカデミック・ポートフォリオ(以下、AP)作成 WS(第 24 回、第 25 回)と同時に開催した。WS の主なスケジュールを表 2 に示す。内容はオリエンテーションの後、メンティーは数回のメンターとの個人面談(メンタリング)を交えながら TP を作成する。一方、メンターはメンターミーティングでメンタリングの進め方の報告と検討を行っている。メンターミーティングを統括するスーパーバイザーは、令和健康科学大学の竹元仁美氏(第 31 回)と本校の北野(第 31・32 回)が担当した。

TP は高等教育機関を中心に広がっているが、初等・中等教育の教員でも作成することは可能である。2024 年度は新たに中等教育学校教員 1 名が TP を作成された。これで、小学校教員 3 名、高等学校教員 4 名、中等教育学校教員 1 名が本校 WS で TP を作成された。

なお、本校の WS は、2013 年にティーチング・ポートフォリオ・ネットワークが公開した TP ワークショップ基準を満たしている。

2025 年 9 月 16 日 受理

*1 総合工学システム学科 一般科目系

(Dept. of Technological Systems : General Education)

*2 令和健康科学大学(Reiwa Health Sciences University)

*3 Safeology 研究所(Safeology Research Laboratory)

*4 木更津工業高等専門学校(National Institute of Technology, Kisarazu College)

表 1 開催した WS の参加者

実施回	メンティー		メンター		スーパーバイザー		オンラインサポート
	本校	他校	本校	他校	本校	他校	本校
31	3名	3名	3名	3名	1名	1名	2名
32	1名	3名	2名	2名	1名	0名	0名

表2 TP 作成オンラインWS の主なスケジュール

	第1日	第2日	第3日
午前	オリエンテーション チャート作成	個人メンタリング(3) TP 作成作業	個人メンタリング(5) TP 作成作業
午後	個人メンタリング(1) TP 作成作業 個人メンタリング(2)	中間発表 TP 作成作業 個人メンタリング(4)	TP 作成作業 プレゼン準備 TP プレゼンテーション 修了式
夜間	意見交換会 TP 作成作業	TP 作成作業	修了を祝う会

3. ティーチング・ポートフォリオを執筆して

絶対にやった方が良い (阿南祐也)

所属大学でも数年前からTP作成ワークショップが開催されていたが、毎年、出張と重なってしまい参加できずにいた。そんなとき所属大学でワークショップを企画している池田先生から「今度、大阪でTPWSがあるけど行かない?」「絶対に行って良かったと思うから」と誘われ参加することにした。正直なところ、そのときは「TPってそんなに良いものなのかな」「自分の中にあるものを整理するだけなら、それほど難しくないのでは」と思っていた。しかし、実際にTP作成ワークショップに参加して感じたのは「かなり悩むし、難しい」けれど「絶対にやった方が良い」ということであった。

ワークショップに参加するにあたり、スタートアップシートを作成した際には、どんどん楽しくなる感覚があった。一方で、うまく書けない部分や支離滅裂な箇所もあり、「これでいいのかな」と不安を感じながらも、これが今の自分の現状だと思い、そのまま提出をした。初日のメンタリングでは、メンターの方がそんなスタートアップシートを丁寧に読み込んでくださっており、私のことを理解しようとしてくれている姿勢がとても嬉しく、強く印象に残っている。また、メンタリングの中で「着任した頃の思いを振り返ってみては?」という言葉をいただき、とにかく思いつくことをすべて書き出してみようと思った。その結果、相変わらず支離滅裂でまとまりのない内容のまま2日目のメンタリングを迎えたが、メンターの方はそんな内容もしっかりと読み込んでくださり、私が何気なく書いて特に気に留めていなかった部分について「これが理念じゃないかな」と指摘してくれた。そのときは「確かにそうかもしれないな」程度にしか思っていたが、その夜、改めて全体を整理してみると、すべてがバチバチと合致していく感覚があった。この感覚は言葉では言い表せないほどとても痛快なものであった。これまで行ってきた教育活動のすべてがつながる教育理念

が見えてきたことで、すっきりした気持ちとともに目の前が明るくなったことを覚えている。3日目のメンタリングでは、そのような感覚をメンターの方と共有できたことがとても嬉しかった。また、3日目の最後に行われたプレゼンテーションでは他のメンターの発表を聞いて大きな刺激を受けた。共通する部分や見習いたい点が多々あり、特に同じ所属の教員の発表を聞いたのは非常に貴重な機会であった。普段から一緒に働いていても、その人が何を大切に教育しているかを知る機会はなかなかない。今回の発表を通じて、もっと一緒に働いていきたいと強く感じた。

当時も今も思うのは、メンターを担当してくださった稗田先生には多大なるご迷惑をおかけしてしまい本当に申し訳ない気持ちでいっぱいだが、それ以上に稗田先生がメンターで本当に良かったと心の底から感謝している。私のことを私以上に理解してくださり、まとまらない考えを1つ1つ丁寧に整理してくださったおかげで、納得のいく教育理念を見出すことができた。この教育理念は、今回のワークショップで新たに生まれたものではなく、これまでの教育活動や取り組みの中に埋もれていたものを発掘したような感覚だった。現在は日常に戻り業務に忙殺される日々が続いているが、自身の教育理念が明確になったことで、迷子にならず、自身がしたいこと・すべきことをしっかりと目指すことができている。

TP 作成WSに参加して (金井友希美)

私は2024年に本校に着任し、その9月のTP作成ワークショップに参加しました。高専に着任する以前は、大学で少人数のアクティブラーニングを支援するほか、大学での非常勤講師を担当していました。また、中学校・高等学校の教員免許を取得しており、もともと理科教育に関心を持ち続けてきました。しかし、自身が担当する授業においては講義形式を基盤とせざるを得ず、学生が主体的に学びを深めるための仕組みを十分に実現できていないのではないかと課題意識を抱えていました。そのような背景のもとで参加したのが、昨年9月に実施されたティーチング・ポートフォリオ作成に関するワークショップでした。

このワークショップへの参加は、自身の教育実践を振り返るとともに、高専教育について改めて学ぶ貴重な機会となりました。当初の私は、大学での経験や免許取得の過程を通じて「理科教育」の枠組みには馴染みがあったものの、高専がどのような教育機関であるかをいま以上に理解しておらず、高専における「専門教育と基礎教育の接続」や「5年間一貫教育の中での物理の位置づけ」といっ

た点については、実感を持って理解できていませんでした。TP ワークショップでは、自分の授業を言語化し、他者の視点からのフィードバックを受ける過程を通じて、「高専教育における物理教育は、単なる基礎科目ではなく、その後の専門教育やキャリア形成を支える重要な基盤である」という認識を深めることができました。また、なぜ大学ではなく高専で教育を行うのかという問いをメンターから投げかけられましたが、その場で明確に答えることはできませんでした。自分自身、高専という教育機関の特性を十分に理解しきれていなかったことを痛感するとともに、その問いかけ自体が高専教育の意義を深く考える契機となりました。

私はまだ教育経験も浅く、十分にまとめられるような実践を持ち合わせていませんでした。そのため、ポートフォリオ作成の過程は、これまでの教育実践を整理するというよりも、高専でどのような教育を展開していきたいかという構想をまとめる機会でした。その際には短期・中期・長期の目標を立て、段階的に取り組む方針を明確にしました。その目標に沿って、今年度はオンライン課題の作成および自動採点の導入や、アニメーション教材を活用した物理現象の可視化などを実際に試みています。

加えて、学生に向き合う際の自らの教育理念を明確にしておくという点でとても大きな意義がありました。また、高専での教育の特徴や他の先生方の実践に触れることで、自分の授業のあり方についても改めて考える契機となりました。

1年を経た今もなお、高専教育における物理教育のあり方については考えるべき課題が多く残されています。「なぜ大学ではなく高専で教育を行うのか」という問いに対して、まだ十分に答えを見いだせてはいません。しかし、その問いを与えられたことが教育者としての振り返りを促し、今後の方向性を探る出発点となりました。今後は、学生の主体的な学びを支える授業づくりを進めつつ、ティーチング・ポートフォリオの継続的な更新を通して教育活動を深めていきたいと考えています。

TPWSに参加して（関彩音）

TPWS 参加のきっかけ

2024 年秋に貴校で開催されたティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ (TPWS) に参加した。本学 (東洋食品工業短期大学) では、FD 専門委員会の活動の一つとしてティーチング・ポートフォリオ (TP) の作成を推進しており、これまでも複数の教員が貴校の TPWS に参加してきた。私は入職 2 年目であり、かつ FD 専門委員会のメンバーでもあることから、今回の TPWS は自身の教育理

念や今後の方針を整理するうえで大変有意義な機会になると考え、参加を決意した。

参加直前と参加中の心境

参加直前は、「自分の教育の軸をつくることができる」という期待とともに、入職 2 年目で実績が少ないことへの不安も抱いていた。事前に作成したスタートアップシートには担当教科や教育方法の記入欄があったが、私は講義を担当してまだ 1 年目であり、前任者から教材を引き継いだ部分が多かったため、十分に記入できないことに戸惑いを覚えた。

実際に参加してみると、一言でいえば「もやもやの連続」であった。最大の要因は、自身の実績や独自に作成した教材が少ないことである。授業の改善案や今後の取り組みたい内容は多くあったが、実際に行動に移していないために記載できないもどかしさを感じた。ただし、アイデア自体は記録して保管し、教育改善に役立てている。その意味で、作成作業は困難であったが、将来を見据えた教育方針を考える契機となった。

さらに、自分一人で作成する場合と異なり、メンターの先生と相談しながら進められたことは大きな支えとなった。TP 作成や教育指導に豊富な経験をもつ先生から助言をいただくことで、自分の TP に一定の自信をもてた。また、質問を繰り返し投げかけられることで、自分の教育理念を深く掘り下げて考えることができた。考えを重ねるほど、理念が変化するため、今回の TP はあくまで「初稿」であり、今後も修正を重ねていく必要があると認識した。また、私自身の性格もあるが、メンターの先生の意見を「正解」として受け止めすぎてしまい、自分の考えとの区別が難しくなることもあった。

全体としては困難さを感じつつも、作成自体は比較的順調に進んだと考える。しかし、他の先生方の発表を拝見すると、自分の TP がまだ薄い内容であることを痛感し、納得できない部分も残った。とはいえ、本学には同世代の教員がいないため、今回、別分野の若手教員の取り組みや学生への向き合い方を知ることができたことは大きな学びであった。今後のキャリア形成や教育活動を学生へどのように還元するかを考える契機となった。

一年を経た現在の心境

参加から一年が経過し、入職 3 年目を迎えた。TP は一度作成して終わりではなく、定期的に振り返り、修正・改善を重ねてこそ意味をもつものである。今年度は、自分なりに講義で工夫した点や授業評価なども踏まえ、内容を修正したいと考えている。自身が迷ったときに軸となり、繰り返し確認したくなるような TP へと磨きをかけていきたい。

TP 作成ワークショップのこと (中山良子)

2024年度のTP作成ワークショップに参加した。私自身は2020年度から非常勤で府大高専、公大高専の教育に携わっていた。前任者の退職により、2024年度は任期付講師として社会関連科目と人権科目を担当しており、専任公募に提出するTPの作成が必須であった。

TP作成ワークショップ開始前は「TP作成において一体、何が求められているのか」が全く見当つかなかった。「公大高専の持つ「使命」と自分の在り方を合致させる作業が必要かな」などと考え、「高専や公大高専に対する理解が浅い私にいったい何が書けるのか」と不安に感じていた。

ワークショップがはじまり、考えあぐねた私は「教える」ことをめぐる「動機」にまつわるエッセイのようなものを書き、苦し紛れにメンターに見せた。私自身は、なぜ「研究」する道を選んだのか、そしてなぜ「教える」道を選んだのか、という理由がTP開始前からはっきりあった。そもそも「なぜ歴史を問うのか」、「なぜセクシュアリティ研究なのか」、「何を問題だと考えているのか」、といった問いかけなしに人文学研究は進まない。紛争、歴史修正主義、人権の軽視、ジェンダーなど、私たちの生活に埋め込まれている躰きに気づき、掘り下げ、知を持って偏見を拭い、共生を目指す・・・そういうあり方そのものが、教育の目標でもあり、私自身の在り方の目標でもある。

公立大高専の「養成する人材像」は「進取」「実践」「共生」である。「共生」は聞き馴染んだ言葉だった。私は1996年頃からHIVに関する活動に関わっていた。NPO「ふれいす東京」さんは2002年頃から「Living Together」というプロジェクトを行っていた。HIVを持っている人も、もっていない人も、どんなセクシュアリティの人も、一緒に生きている。Living Together, いいかえれば「共生」は自分にとっても自明の課題だった。病気やセクシュアリティをめぐる偏見を拭うことはあたりまえで、重要なこと。

「歴史総合」の授業では「戦争が無い日本に生まれて幸せです」といった類の学生のコメントに胸がつぶれる思いがする。自分たちの危い足元から、今ある前線まで思いを巡らす力がある。排外主義の姿をメディアで確認するたび、学生がこのニュースをどう理解しているか気になる。かつて戦争においてこの国がいかなる振舞いをしたのか知る必要がある。それらの知識は異なる国・他者を理解/尊重する力、偏見を払拭する力に繋がるはずだ。学生との時間は私に語る「動機」を作る。今の社会において届いていない知識を伝えるのが私の仕事だ。

メンターは「教える」「動機」を書きなぐった私の原稿

を見て、微笑みながら言った、「このまま続けて書いてください」。そこで私はTPをこう解釈した。「「動機」は既にある。それを目に見える形でアウトプットする」、つまり「私は誰で、何を高専で「教える」のかを書けばよい」。私の「教える」行為の背骨にあるものは何なのか、そして「教える」ことで学生・高専・社会にどう資することができるのか」を「わかりやすく、整理して」伝えればよい。その後の原稿提出で、続きを読んだメンターがやはり「このままで大丈夫です」と笑っていたので、安心して只々終わりまで書き続けた。「このままで大丈夫」、というのは途方もない肯定の言葉で、私の心理的安全性を担保した(セクシュアリティに対する偏見にも、歴史修正主義者によるヘイトスピーチにも疲弊している私の心理的安全性が、ワークショップの場で保たれることは、自分にとってとても重要だった)。

TPは完成し、私は2025年度から専任教員となった。日々、学生の発言からこの社会の課題が透けて見える。さてそれらにいかにかアプローチするのか。TPの完成はゴールではなく、「共生」を実現するために今日私が何を語るのかを、今なお問うている。

ティーチング・ポートフォリオを作成して (難波秀行)

私は福岡大学で3年間、和洋女子大学で3年間、日本大学で8年間、2024年4月より現在の大阪大学に着任して、これまで一貫して初年次を中心に体育実技授業を担当してきた。ティーチング・ポートフォリオ(以下TP)を作成するきっかけは、筑波大学の木内敦詞先生が先行して体育分野でTPを作成されており、紹介を受けて2024年度のTP作成ワークショップに参加した。参加前は、TPは研究業績ではなく教育業績をまとめるものであるという程度の理解でした。また、大阪公立大高専で行われたワークショップでは、知り合いの先生が一人もいない状況で分野も異なる先生方ばかりで不安もありました。

実際に参加してみて、全体のミーティング、メンターとの個別ミーティング、自身で行う作業の3つが融合されたプログラムで、夕食を共にする意見交換会や、最終のプレゼンテーションに至るまで、計画的なスケジュールで構成されており、参加前の不安は、初日のプログラムで解消され、二日目以降、加速的にTP作成を進めることができた。何故、体育教員になったのかについて幼少期～小学生～大学生～社会人に至るまでに起こった出来事を振り返り、自身の中にある思いや気持ちの核心について見直すことができた。それはメンターの谷野先生と面談する中で上手く引き出していただいたことに起因する。また、TPチャート作成の過程において、授業で大事にしている

理念(何のために授業をしているのか)をまとめることで、その理念はどこから生まれてきたのかを考える過程での気づきもあった。TPを作成する過程で最も苦労したのは、現在、行っている教育活動と、そこで大事にしている理念と経験や理想を結び付ける作業でした。さらに、それらと現在所属している組織の理念や取り組みを結び付けるのは、やや無理があるように思いましたが、一つ一つを深掘りしていき理解を深めていくことで、それらが繋がり、過去—現在—未来(理想)を一本の筋で繋げることができた。

TP作成後に教育現場に戻り、最も強く感じたことは「自身の考えに迷いがなくなったこと」の一言で表せる。具体的には、学生教育に自信を持って携われること、授業改善やカリキュラム改定を前進させることなどが挙げられる。また、私の場合、研究活動と教育活動がある程度、リンクしている分野に携わっているため、研究面でも迷いが減り、計画的・意図的に進められるようになった。さらに大学の使命や建学の精神を理解した上で、自身の活動を位置づけることで、自由度を持って学生教育や研究活動に取り組めるようになったと感じている。

最後に、この貴重な機会を提供してくださった大阪公立大高専の北野健一先生、谷野圭亮先生(メンター)をはじめ、運営スタッフの皆様にご心より感謝申し上げます。

TP作成WSに参加して(吉川明里)

私は大学卒業後から7年間、講師として教員を続けてきました。中学校、高校、高専と複数の教育機関で授業を担当する中で、教育に関する悩みは尽きることがなく、その悩みの多くはどの教育機関でも共通していました。

当初、ティーチング・ポートフォリオ(TP)作成ワークショップへの参加は、就職活動に向けた意味合いが大きく、これまでの教育活動を落ち着いて振り返れればよいという程度の考えでした。しかし、TP作成後の教育を変える貴重な機会となりました。

ワークショップでは早川先生のご指導とご支援の下、TP作成に取り組みました。先生は私の考えや問題点、講じている手段、経歴など一つ一つを丁寧に聞いてくださったため、落ち着いてこれまでの教育活動を振り返ることができました。

この過程での最も大きな成果は、自分自身の「教育の軸」を言語化できたことです。授業づくりや学生支援において、私が行っているものの、なぜそうしているのか曖昧だった部分を明確にすることができました。

さらに、自身の悩みの種となっていた部分をプラスに捉え直すことができました。例えば、専門知識の不足を痛感し、「学部や大学院を理工学系にしておけば」と後悔す

る部分もありましたが、6年間教育について考え続けてきたことは決して無駄ではないと気づくことができました。性格面でも同様の転換がありました。「親しみやすい反面、なめられやすい」という自分の特徴を弊害として捉えていましたが、早川先生やオーガナイザーの先生方の経験や意見を交えたお話を通じて、リフレーミングができました。基本的にネガティブ思考の私にとって、自分の考えではなく他の先生方の客観的な意見として聞けたことで、素直に受け入れることができたのだと思います。

教育の軸が明確になり、自身の経歴をプラスに捉え直せたことで、私自身の特性をどのように活かして教育活動を行っていくかを具体的に考えられるようになりました。授業づくりや学生支援において、以前のような迷いが消え、少し自信を持って取り組めるようになったと感じています。

複数の先生方に自分の考えや教育について聞いていただき、意見をもらえる機会は滅多にありません。TP作成は単に自身の教育活動を振り返る良い機会というだけでなく、ワークショップという形式だからこそ得られるものがあると思います。メンターの先生を筆頭に様々な教育者が参加し、一緒に考え、議論できる環境は他では得難いものです。他の参加者の意見や経験を聞くことも、自分の教育観を豊かにする重要な要素でした。単独でのTP作成では得られない、「同じ」教育を見つめる「多様な」視点が交流するワークショップ形式だからこそ、私にとって一層貴重で意味深い経験となったと感じています。

ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップに参加して(吉田晃基)

私は高専教員4年目の2024年9月に、ティーチング・ポートフォリオ(TP)作成ワークショップに参加させていただきました。参加から約1年経った今、あらためてその体験を振り返ってみたいと思います。

ワークショップ参加前の私は、毎年授業の改善を重ねているつもりでしたが、自分の教育に対する取り組みや考え方を体系立てて文章化したことはありませんでした。TPについてもほとんど知識がなく、どのようなものなのか想像もつかない状況でした。しかし、これまで漠然と行ってきた教育実践を整理し、言語化する良い機会になるのではないかと期待していました。

3日間の対面でのワークショップは、想像以上に濃密な時間となりました。最も印象的だったのは、メンタリングを通じて自分の中の根底にある考え方に気づくことができたことです。これまで無意識に行っていた教育実践の背景には、自分でも気づいていなかった一貫した価値観

があることを発見できました。一方で、漠然とした思いを明確な言葉で表現することには想像以上に苦戦しました。普段は感覚的に行っていることを論理的に説明する難しさに直面し、何度も書き直しを繰り返しました。また、3日間という限られた時間の中で、納得のいく形まで仕上げることの困難さも痛感しました。こうした試行錯誤の過程において、担当していただいたメンターの石丸先生には特に感謝しています。私の人となりをよく見て、的確なアドバイスをしていただけました。単に技術的な指導だけでなく、私の考え方や反応を丁寧に観察していただき、適切な方向へと導いてくださったことが印象に残っています。

ワークショップから約1年が経ち、私は他の高専に異動することになりました。この変化は、ワークショップで構築した教育観の真価が問われる場面となっています。現在は、これまでの取り組みが新しい高専においても有効かどうかを判断しながら、異動先の環境や学生の特性に合わせた新たなやり方を模索している段階です。

また、作成したTPは、単なる過去の記録ではなく、現在も授業設計や学生対応における判断基準として機能しています。特に新しい環境での挑戦において、自分の教育スタイルの核となる部分を見失わずにいられるのは、ワークショップでの成果だと感じています。

このワークショップ体験は、教育実践を文書化することの価値を教えてくださいました。新しい環境での経験を積む中で、当時作成したTPをさらに発展させていく必要性も感じています。環境の変化を成長の機会として捉え、継続的に自分の教育観を見直していきたいと考えています。

最後に、このような貴重な学びの機会を提供していただいた関係者の皆様、そして3日間にわたって熱心にご指導いただいたメンターの先生方に、心から感謝申し上げます。

4. メンターを担当して

メンターとして (竹元仁美)

TPを作成するメンティーと伴奏するメンターには多くの役割や人間性が期待されている。「To be a good mentor」ワークでよくあげられるのが、洞察力、俯瞰力、統合力、質問力、傾聴力、言語化能力、語彙力、包容力、誠実性、などの能力である。周囲のメンターを思い浮かべると勢いよく首肯されるものの、自身を顧みると赤面し首を傾げたくなる。個人的な意見を言わせて頂くならば、短時間(初対面)でメンティーやメンター(メンター間)と信頼関係を構築する人間関係形成力、特にmutual respect(相互に尊重しあう)が大前提と考えている。TPを作成

する過程で人生を振り返る機会が多くなる。出会って間もない時期に、人生と一緒に振り返っても違和感を感じさせない人柄が欠かせない要素となる。したがって、メンターは教育経験や過去にTP/APを書いた経験を持つが、適性の観点から向き不向きがないわけではない。他者への興味関心を感じない場合は難しいかもしれない。ソクラテスの問答のように、1対1の真摯な対話から、より深い次元での内省を探り当てていく過程がメンタリングの肝と考えている。したがって、一人の人間として相手と対峙する能力、胆力のようなものが必要である。そして混とんとして先が見通せない時期を乗り切る、居心地の悪さに耐えうる「negative capability」があるとより安定感が増す。

今回、担当させていただいたメンティーは専門の学問領域をこよなく愛する情熱に溢れる若い方であった。対話においてメンティーが紡いだ物語が、幼少期から学問に魅入られ、学問と共に生きていく決断した半生を、鮮やかな色彩で「鉱脈」として浮かび上がらせていた。ここでいう「鉱脈」とは、それぞれ独自の人生を形作るコアの部分をさす。すでに顕在化し表層に表れている「鉱脈」を持っている場合もあれば、「鉱脈」が人の奥深くでひっそりと存在し、探し当てられ陽の目を見る時を待っている場合もあるだろう。今回のTPWSにおいて、その担当したメンティーとの真摯かつ温かな交流から、メンティーが自身の鉱脈に気づき、掘り出し、言語化し、人生(ストーリー)をTPとして結晶化させることできたと評価している。それがメンターの使命かつ醍醐味と思える。TP作成を通して、その人の持つ唯一無二の「鉱脈」を二人三脚で掘りあてる旅をする。なんと趣深い旅だろうか。知人のカウンセラーが書いた物語である「鉱脈」からこのようなインスピレーションを与えてもらった。

2024年冬のWSでの対面でのTPのメンター (稗田吉成)

TPのメンターとしては2回続けてオンラインWSのスタイルでさせてもらいましたが、今回は対面でのメンターでした。この間にAPのメンターを対面でさせてもらったときも私は対面でのメンターの方がやりやすいと感じていて、今回は改めてそれを感じたWSになりました。

メンターを行うにあたり、当たり前ですが、事前にメンティーに書いてもらったスタートアップシートを読ませてもらいながら、メンティーがどんな方なのか、どんな風に話をしているのかなど考えるのですが、今回はまず「これはTPを書くというより、APを書くような立場の方ではないか？」という印象を持ちました。それは職階や役職に対して、書かれている仕事の幅も広く、担当科目の教育だけでなく、学校での立場やそれも越えた立場での、地域との連携を意識した活動もかなりしておられると感じたか

らです(実際はその活動が教育理念に繋がっていたのですが、そこはまだおぼろげな繋がりでした)。ただ今回は TP を書くのですから、どのような理念で教育しておられるのか、この機会にしっかりと原点に戻ってもらう必要があるだろうと少し気負いが出ていたので、「メンターはあくまでもメンティーの伴走者として、メンティーに安心して話をしてもらえ環境を整えることが重要である」と改めて思いながら臨みました。

今回のように忙しくしておられる方には、「WS の期間は通常業務から離れ、自分のために使える貴重な時間であることを再認識してもらって、その時間・機会を楽しんでもらいたい」という話もしながら、これまでのことをいろいろと聞かせてもらいました。それがメンターにとっての振り返りになっているのですが、そのような中、メンティーが教育理念としているのではないかと思うようなキーワードが早い段階で出てきているように感じました。ただそれは私が勝手に思いこんでいる可能性もありますし、そこに誘導するようなことをすべきではありません。そこでメンターミーティングに持ち帰ってスーパーバイザーや他のメンターと意見交換し、さらに深掘りするにはどうしたらよいかと相談させてもらいながら進めました。

そのような様々なやり取りの中で、メンティー自身が腑に落ちる気付きがあったようで、とても納得しておられたのが印象的で、メンターとしてはそれをとても嬉しく思いました。カバーページではそのあたりもうまくまとめてあり、第 3 稿に向けて書きたいことを整理していくことを楽しみにしておられたのも印象的でした。ただ戻られると他の業務に忙殺されて大変そうであったことは第 3 稿が出てくるまでに時間がかかったことから類推できましたし、一緒に記載されていたメッセージからも読み取れました。しかしそれらも含め、この TPWS での経験を通して、メンティー・メンターがお互いに、さらに前に進める力を得られたと信じています。

TP 作成 WS のメンターを担当して (山川修)

2024 年の冬の TP 作成 WS でメンターを務めさせていただいた。大阪公立大学高専で開催される冬の TP 作成 WS には、2014 年からメンターとして参加しているので、今回で 11 回目の参加であった。私が大学の教員を定年退官した 2023 年からは夏の TP 作成 WS にも参加しているので、今は年に 2 回、大阪公立大学高専でお世話になっている。

さて、今回のメンティーの方は、大学教員の経歴は長くない、授業を自分の責任で設計するようになってまだ 1 年という方だった。にもかかわらず、スタートアップシートを見る限り、いろいろと授業に工夫をされており、最初の

メンタリングではそのあたりを中心に話をさせていただいた。第 1 稿の段階では、理念に関して、まとまっていなかったが、いくつかのアイデアが出されていた、2 日目のメンタリングの中で、理念に関係するキーワードが出てきて、それが最終稿の理念にもつながっていった。そして最終的に、理念→サブ理念→方法、の一貫性も見事に記述され、それに基づいてカバーページも作成され、まったく申し分がなかった。

ところで、私は 2024 年 2 月から、自分の研究の一環として Somatic Experiencing という身体からアクセスするトラウマケアの手法を学んでいる。この研修には認定心理士や精神科医の方が多く参加されているが、午前中の講義の後、午前中で学んだ内容の実践的練習のため、午後からは参加者同士がセラピスト役とクライアント役になり、模擬セラピーを実施する。そして、そこに同席している先輩であるアシスタントから、いろいろとアドバイスを受ける。認定心理士や精神科医という本職の方と一緒に模擬セラピーをするわけだが、そのときに、いままで TP 作成 WS でメンターをした経験が、かなり生きてきている。というか、メンターの経験がなければ、模擬セラピーなど、どうやって良いかわからず、とてもそんなことはできなかっただろう。

セラピーの基本は、クライアントとセラピストの間に信頼関係を構築し、その場を安心・安全な場にするところである。その意味では、メンタリングの基本も同じで、メンターをすることが、安心・安全な場を創る練習になっているということを痛感している。そしてこのあり方は、教育の場で、学生と向き合った場合に、安心・安全な場をつくるということに通じているので、今後、できるだけ多くの方に、メンターを体験していただきたいと考えずにはいられない。

TP メンターを担当する意義とは(山下哲)

私は大阪公立大学高専 TP 作成 WS に毎回メンターとして参加させていただき、今年度で 12 年目となる。毎回参加する度に思うことは、自分自身の未熟さを痛感し、メンティーから多くの学びを得て、私自身を教員として成長させてもらっているということである。今回の TP メンター経験を通して、TP メンターを担当する意義について考えてみたい。

2024 年度夏に担当したメンティーは、高専教員 5 年目ではあるが、これまでの教育実践をよく自己省察されており、スタートアップシートの段階でも、混沌とはしていたが、十分に質の高い TP を作成できるような状況だった。しかし、この TP 作成 WS に 3 日間参加してもらうので、

多くの業務を伴う日常ではできない自己省察として、メンティーの教育理念の深掘りを一緒に行うことにした。まずは、メンティーに印象的な体験を幼い頃から振り返ってもらい、いかにメンティーの教育理念と関わりがあるか、一緒に深掘りしてみた。幼い頃からの体験が1つずつ教育理念と繋がっていくのを一緒に共感し、最終的な教育理念がメンティーの実体験から構築されてきたことが少しずつ明らかになっていった。メンティーも普段意識していなかったことが、自分自身の実体験に起因していたことに徐々に気付かされ、自身の教育理念に紐づけられていく様子にとっても感動されていた。この感動に基づき、教育理念や教育方針を記述化することで、自分自身だけでなく、TPの読者に深く理解し共感できるものが作成されていった。

このように、メンティーの教育理念の深掘りに共感しながらお付き合いできたことは、メンターである私自身の教育理念とメンティーの教育理念を相対する良いきっかけを与えてくれた。メンターはメンティーから共感を通して多くのことを学ぶことができ、メンター自身の教育理念を省察するという有意義な時間を過ごすことができる。これは自分一人の自己省察では体験できないものであり、TPメンターでしか味わえない気付きや感動である。TPメンターを担当することで、メンティーから気づきという贈り物をいただけるのだ。このように感動する機会を与えていただいた大阪公立大学高専スタッフに感謝の意を表したい。

5. スーパーバイザーを担当して

スーパーバイザーとして (竹元仁美)

大阪公立大学工業高等専門学校におけるスーパーバイザー (以下, SV) 経験は、リーダーシップ、フォロワーシップを改めて考える契機となった。本高専のWSでは、TPもしくはAPを作成するメンティーとして、高専所属の教員だけでなく他機関からも受け入れているため、教員仲間という大きなくりのゆるやかで多様性のある混成チームとなる。このゆるやかな多様性がとても興味深い面白い味を生み出すことにつながっている。だからこそ、その面白さを損なわないように、SVが各メンバーが納得・満足のゆくポートフォリオを作成できるようチーム環境を整えることが求められる。メンティーチーム、メンターチームがそれぞれ、また相互に、よい方向で化学反応を起こせる雰囲気や醸成することがSVとして重要な役割として求められる。メンターチームには、経験豊富なメンターがいる一方で初めてのメンターもいる。だからメンターチームの持つ知識・技術・包容力が初心者マークのメンタ

ーを安心・安定させ、メンターチームの助言をもとに、比較的落ち着いてメンティーとのかかわりが持てる。メンティーとの対話が想定内である場合も、予想のはるか斜め上に行く展開もありうる。しかし、メンター自身が一緒に揺らぐことは決して否定されるものではない。その一緒に揺らぐ体験をするからこそ醸成される信頼感、共感性が得られる貴重な経験になり得る。ある種、「虎穴に入らずば虎子を得ず」である。しかし、あえて火中の栗を拾うような、虎穴に入る覚悟を持つには、メンターチームがセーフティネットであり、「心理的安全性」が保障されるチームであることが肝要だ。このようなメンターチームの雰囲気や風土を醸成するSVが、各メンターがリーダーシップとフォロワーシップを発揮できる複層的複合的な役割をとれるよう支援をすることがワークショップに必要な不可欠であることを学ばせていただいた。このような機会を頂いたことに深く感謝する。

6. メンティーの事後アンケート

WS終了後、メンティーにGoogle Formsでアンケートを実施した。10名中8名から回答が得られた(回答率80%)。表3にアンケート結果の一部を示す。

表3. 事後アンケート結果 (一部抜粋)

3. ワークショップのプログラム設計について
(2) ワークショップは自身のキャリアにとって有意義な内容だった (そう思う 7名, どちらかといえばそう思う 1名, どちらかといえばそう思わない 0名, そう思わない 0名)
4. ワークショップのスタッフについて
(1) メンターからの助言は役に立った (そう思う 7名, どちらかといえばそう思う 1名, どちらかといえばそう思わない 0名, そう思わない 0名)
5. ワークショップの成果について
(3) ティーチング・ポートフォリオは自身の教育改善につながる (そう思う 6名, どちらかといえばそう思う 2名, どちらかといえばそう思わない 0名, そう思わない 0名)
6. ワークショップ全体について
(1) ワークショップは全体的に満足できるものだった (そう思う 7名, どちらかといえばそう思う 1名, どちらかといえばそう思わない 0名, そう思わない 0名)

2024年度の特徴は、メンティーがすべて対面で参加したことである。コロナ禍前の2019年度までは対面での開催であったが、2020~2022年度はオンラインでの開催となった。コロナ禍明けの2023年度はメンティーが対面参加とオンライン参加を選択できるハイブリッド開催となった。2024年度もメンティーが対面参加とオンライン参加を選択できる体制をとったが、結果としてTP作成WSのメンティーは全員対面での参加となった。

この事後アンケートの設問は、第3回以降変更していない。今回、コロナ禍前後におけるWSの効果を検証するため、表3に記した4個の質問項目について、コロナ禍前のWS参加者と比較した。「そう思う(4)」、「どちらかといえばそう思う(3)」、「どちらかといえばそう思わない(2)」、「そう思わない(1)」と、回答を()内の数値に置き替えて平均を取った結果を表4に記す。この結果より、コロナ禍後においても、コロナ禍前と同程度の効果が出ていることが伺える。

表4 コロナ禍前後の比較

質問項目	WS開催時期 2010～ 2019年度 (n=136)	2024年度 (n=8)
自身のキャリアにとって有意義な内容だったか	3.64	3.88
メンターからの助言は役に立ったか	3.86	3.88
自身の教育改善につながるか	3.65	3.75
全体的に満足できたか	3.78	3.88

7. おわりに

以上、2024年度に開催した第31・32回TP作成WSの概要、および参加者（メンティー7名、メンター4名、スーパーバイザー1名）の感想を記した。

2024年度の特徴は、メンティーがすべて対面で参加したことである。コロナ禍前の2019年度まではすべて対面での参加であったが、2020～2022年度はオンライン参加のみ、2023年度は対面参加とオンライン参加の両方がおられた。事後アンケートの結果、コロナ禍後においても、コロナ禍前と同程度の効果が出ていることが伺えた。

本校では2025年9月9～11日に、第33回TP作成WSを行い、TP作成者が常勤教員64名中54名(84%)となった。第34回TP作成WSは2025年12月25～27日に開催予定である。この原稿がこれからTPを作成する諸氏の参考になれば幸いである。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 23K25674, 24K06117 の助成を受けたものです。

また、本稿に寄稿いただいた阿南祐也氏（活水女子大学）、関彩音氏（東洋食品工業短期大学）、難波邦行氏（大阪大学）、金井友希美氏、中山良子氏、吉川明里氏、吉田晃基氏（以上本校）に心より感謝いたします。

参考文献

- [1] 北野ほか：日本初単一教育機関内ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップを開催して、大阪府立高専研究紀要，第43巻，pp. 63-70(2009)。
- [2] 北野ほか：第2回ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ開催報告，大阪府立高専研究紀要，第44巻，pp. 57-64(2010)。以降第58巻まで毎年報告を掲載している
- [3] 大阪府立大学高専ティーチング・ポートフォリオ研究会編著：「実践 ティーチング・ポートフォリオスターターブック～実質的な教育改善活動を目指して～」，NTS出版(2011)。
- [4] ピーター・セルディン著，大学評価・学位授与機構監訳・栗田佳代子訳：「大学教育を変える教育業績記録」，玉川大学出版部(2007)。